

<b>Title</b>	ふたつの8・15について：和解への道を閉ざしてはならない
<b>Author(s)</b>	姜, 尚中
<b>Citation</b>	キリスト教と諸学：論集, Volume29, 2015.3：7-23
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=5517">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=5517</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

## ふたつの8・15について

——和解への道を閉ざしてはならない

姜 尚 中

こんにちは皆さん、大変暑い中わざわざここにお集まりいただき、心より感謝申し上げます。例年八月一日は本大学でこのような催しはなかったのですが、私はどうしても今年「二〇一四年」は、いや今年からこのような催しをやりたいと、学長というよりは一人の聖学院で学生と常々対面する人間として、何としてでもこのような会を設けたいと思いました。私のこのような非常に自分勝手と言えば自分勝手な希望だったのですが、このような会を出をいろいろな方々がしっかりと受け止めてくださり、今日のこの会が実現しました。この会のために多くの方々にいろいろなところでご尽力いただき、やっとうこうした会ができるようになった次第です。

### 第一次世界大戦前夜再び

今、お祈りの中でも菊地順チャブレンからご指摘があつたとおり、また今日の礼拝での聖書箇所のマルコによる福音書第四章三〇節から三二節にありますように、私は学生というものは「からし種」だと思っておりました。学生がこの大学で学び、そしてこの大学を後にするとき、それこそ小鳥たちが集えるような大きな、大きな木へと育つ

ていく、そういうイメージを描いておりました。ヴォーリーズ、あの有名な建築家であり、また近江で活躍された熱烈なクリスチャンであられたヴォーリーズは、神の国をこのからし種に例えています。私はこの「からし種」はある意味において戦後の日本国憲法であり、戦後日本のそのような憲法に裏付けられた私たちの社会のいわば仕組みでもある、というように考えても決して過言ではないと思います。しかしながら、今年六九回目のこの8・15がめぐってくる中で、残念なことに内外において騒然とした状況が我々を取り巻いている、ということは皆さんもご承知のとおりです。8・15は少なくともあの戦争によって亡くなられた全ての方々の犠牲を悼み、そして平和への祈りを静かに捧げる日でしたけれども、今日においてはむしろナショナリズムを高揚させ、そして愛国心をより強めるための日に変わってしまった面もないわけではありません。

かつてドイツの大統領であったヴァイツェッカー氏が、ドイツが先の大戦で犯した罪を悔い、そして敵と味方を問わず、戦場においてまた収容所においてあるいはガス室において、あるいは極寒のシベリアで果てた人々を含めていろいろなところで亡くなられた人々に言及されたことは、我々がよく記憶しているところです。戦争というのはどういふものであったのか、私は一九五〇年、戦後生まれの人間として実感しておりません。しかしながら、百人の人間がいればきつと戦争体験というものは百様であったに違いありません。中国で、あるいは南方のジャングルで、あるいは大空襲によって、あるいは原爆投下によって命を落とした方がいます。あるいは朝鮮半島から連れて来られ、あるいは日本に来ざるを得なかった人々が、日本各地の炭鉱であるいは極寒の北海道の地で、命果てました。それがおびただしい数に上ったということは周知のとおりです。

日本の戦後は間違いなくこの戦争体験から出発したと思います。戦争体験、すなわちそれが戦後を形づくってきたと思います。たとえそれがどのように消極的な厭戦によって作られたものであるにせよ、日本の国民の多くはも

う二度と戦争はしたくない。戦争ほどこの世の地獄はない。‘War is hell’ 戦争は地獄である。多くの方々が内地、外地を問わず、戦場、収容所を問わず、そのような気持ちで、廃墟の中で新しい日本というものを作ろうとされたのだと思います。

しかしながら、今日皆様方が目を凝らして見れば、先ほど、菊地チャプレンからご指摘もありましたとおり、まさしく現在の日本および日本を取り巻く環境は、第一次世界大戦前夜と言っても決して大げさではないのではないかと思います。一九一一年、第一次世界大戦の導火線の一つになった第二次モロッコ紛争の中で、シュペングラーという『西洋の没落』を書いた思想家は、「ヨーロッパは今、集団的自殺に向かって突き進みつつある」という名文句を残しております。あえてその思想を見習って言えば、「今、東アジアは集団的自殺に向かって突き進みつつある」。このように断言しても決して不当ではないかもしれません。少なくともこのようなことを言わざるを得ないほどに、いわば可燃性の戦争へとつながりかねない、そのような不穏なものが満ちていると言わざるを得ません。第一次世界大戦もサラエボで銃弾によって始まりました。誰もがそのような戦争を望んでいなかったと言われています。あのような過剰殺戮時代の幕開けが開かれるであろうとは、誰も予想しなかったと思います。ならば今日の東アジアにおいて、そのようなものが繰り返されないと誰が断言できるでしょうか。六九回目の八月一五日をそのような中で我々は迎えざるを得ない。戦後生まれの私にとっても、ある意味においては驚天動地のような、そのような思いで六九回目のこの日を迎えております。

## 八月一五日の意味

私は今から三〇年ほど前、戦後四〇年を控えて朝日新聞の『論壇』に初めて寄稿しました。そのタイトルは『ふ

たつの八月一五日』です。八月一五日、先ほど菊地チャブレンから敗戦という言葉が出てきました。日本では今これを終戦記念日としており、日本の終戦と韓半島、朝鮮半島の解放記念日とはどこでどう重なり合うのだろうか。このふたつの八月一五日が重なり合ったとき初めて私たちは、かつての植民地と非植民地と、敵と味方を問わず、和解への道へと導かれていくのではないか。ということのを三〇年以上前に、今から言えば非常に拙劣な文章でしたけれども、新聞に初めて投稿したことを記憶しております。

あれから三〇年、和解どころではありません。あちらに付くか、こちらに付くか。あれか、これか。このふたつを迫るような雰囲気が我々の社会の中に充満しております。共感、compassion は失われ、そして憎悪と嫌悪と対立と不信の目が日本と日本を取り巻く国々との間に充満しているということを、皆さんは常々、皮膚感覚でご理解されていると思います。

現在の東アジアの状況は第一次世界大戦という、大戦によってしか解消できないほどの大きな問題を抱えているのでしょうか。東アジアの現況を見れば、なるほど中国の軍拡が、また中国の海洋進出が大きな脅威になっていることは否めません。しかしこの西太平洋をめぐる米中の間の地政学的な対立関係というものが東アジアを大きく、大きく揺るがしているということについて、私たちはこれをどのように理解し、今後そのような新しい東アジアの地政学的なパワーシフトに対してどう対応していくべきなのか。あるいは日本に対するかたくなとも言えるような韓国の態勢を私たちはどのように理解したらよいのか。かつて韓流ブームや日韓の和解、民間の交流、文化交流、様々ないわば和解への花園のようなものが咲き乱れておりました。しかし今、凍てついた二国間関係がやがてこの日本の社会においては聞くに堪えないような罵詈雑言になり、また韓国においては反日の気運というものが決してなくなることはありません。そして現在の日本の中に、皆さんの中にもきっとそのような考えをお持ち

の方がおられると思います。新たな戦前の空気というものが広がっているのではないかということを、かつて戦争を体験された多くの方々が口に出すようになりました。戦争を知らない戦後生まれの私たちにとって、戦前の空気とはどのようなものなのか知る由はありません。しかし、活字や映像や物語や、様々なものによってそれを想像することが出来ます。明らかに息苦しく、人が自分で感じていることを口に出せない。そのような見えざる空気というものが一方であることを、私たちは否定することはできないと思います。今や三〇年前に私が新聞で書いたようなふたつの8・15がいかに接合点を、そしてさらにはそれが交錯する地点を我々が見出せるのか。そのような問いかけは、いわば痴人の戯言のように一蹴されるような時代になってまいりました。今日八月一日をめぐって様々な動きがこの日本列島の中にあると思いますけれども、むしろ逆に、8・15はいまや私たちの中で断絶の象徴となったと言っても過言ではないと思います。また世代的に見れば8・15がどのような日であるのかをいわば歴史の記憶からも理解できない新しい世代が、日本のみならず韓半島や中国においても世代交代して生まれるようになりました。

亡くなった政治学者の丸山眞男という人は、原点回帰、つまり八月一日の大本に戻る。もう一度戻らんだということを安保闘争の中に述べております。けれども、いまや八月一日、日本で言えば昭和二〇年、一九四五年八月一日に戻るということは、まさしく私たちの社会にとっては、むしろ極めて難しい作業として今我々に突き付けられているわけであります。私は、歴史は決して一つではなかったと思います。歴史の中には必ず様々な可能性があったと思います。あのような八月一日を迎えなくても済んだ可能性は十分あり得たし、またこのような六九回目の八月一日を迎えなくても済んだ可能性はきつとあり得たと思います。

そのような可能性を私たちは考えて初めて、この八月一日の意味を改めて噛みしめることができるのではない

でしょうか。

### なぜ八月一日なのか

それではなぜ八月一日なのか。最近の研究では「八月一日革命神話説」というものが出ていますけれども、私たちが考えなければならぬことは、八月一日ではなくて、もし八月一日だったかどうかということ。もし八月一日ではなく、六月一日に戦争が終結していたとしたならば、現在の朝鮮半島は分断されていたでしょうか。あるいは、果たして広島、長崎の原爆投下があったでしょうか。六月に戦争の終結を迎えることは荒唐無稽な幻想だったのでしょうか。最近の研究によれば、六月の時点において間違いなく日本の海軍と陸軍はソ連参戦を察知しておりました。ヤルタ会談においてどういう話がスターリンとルーズベルト、チャーチルの間に交わされるのかということ、当時のインテリジェンスははっきりと掴んでおりました。軍部の中のファナティズム、軍部の中の狂った人々が徹底交戦を唱え、最後まで頑強に終戦に抵抗し、結果としてあのような聖断が行われたというストーリーを、我々は今も信じておりますし、また様々なメディアにおいても皆さんはそのような報道に接してきましたと思います。しかし、間違いなく日本の戦争最高指導者たちはソ連参戦を六月の時点ではっきりと捉えておりました。少なくとも日本の陸軍と海軍は独自のインテリジェンスを通じてそれを知っていた。唯一知らなかったのは外務省でした。外務省は完全に蚊帳の外にあり、そして日本の最高指導者は、六月から八月まで六〇万以上の日本国民が殺されるという事態にもかかわらず、一丸となつて戦争終結に精を出すことができませんでした。全ての災いの種を軍部の強硬なファナティックな聖戦論者に託すことによって彼らはそこから免罪され、そして八月一日を作り出し、そして自らの権力をそのまま保持したまま日本の戦後が始まったのです。早くから、五月の終わりの時点

から、当時のリスボンやヨーロッパのいろいろなところから明らかに暗号電文を通じて、ソ連参戦が間違いなく七月にあるであろうという、いわば最大限の秘密情報を陸軍と海軍がすでにキャッチしていたということを、我々は理解していかなければなりません。にもかかわらず、当時の最高戦争指導者たちは、八月の一日になるまでこの戦争を終結させることができなかった。もしそれであつたならば少なくとも沖縄戦の後に、日本は間違いなく、七月に出たポツダム宣言を速やかに受諾すべきでした。沖縄戦のあの悲惨な状況を考えれば、戦争遂行能力がないということは陸軍の中でも理解されておりました。

実態は、挙国一致、本土決戦ということを唱える人々は陸軍の主流派からもすでに放逐されていたということです。広島と長崎があり、そしてソビエトが参戦する状況がある海軍のトップはこのように述べております。「天佑<sup>てんゆう</sup>である。これによつて戦争は終結できる」。天佑である。天が与えたもうた啓示である。これほど素晴らしいプレゼントはない。と言っているのです。あれだけ広島、長崎で多くの人々が殺戮され、またソビエトの無謀な参戦を見ながら、戦争指導者たちの口から出たものは天佑ということでした。日本は広島と長崎に原爆が落とされ、ソビエトが参戦したがゆえに無条件降伏に調印したわけではありません。天皇の聖断は、本土決戦のための築城ができていないということが最大の理由でした。広島と長崎であれだけの人間が死んでも、またソビエトの進攻によって北海道方面にあればどの悲惨な状況が起きて、これは決して聖断の理由にはならなかったということです。天佑であつたのは、戦争指導者たちにとつての天佑であり、国民にとつてはこれは地獄というより阿鼻叫喚のそれこそ奈落だつたと思います。



## 高木惣吉の怒り

このことは海軍の米内光政の下で戦争終結に当たった熊本出身の高木惣吉の日記の中に述べられております。高木惣吉は後に『六韜新論』という書を残しました。彼はこの中で最高戦争指導者たちの無為無策、怯懦きようだを口をきわめてのしり、そして国民を物件のように、物のように見なし、国民を単なる資源として扱う国家、そのような国家の酷薄さを、また口をきわめて批判しております。高木惣吉は、国民はまさしく奴隷のように、物として物件として扱われているということを、縷々るるこの本の中で述べています。つまり高木に言わせれば、日本は六月の半ばにおいて戦争終結があり得たということです。最後まで戦争を指導した人々は自らの無責任の中に逃れ、そして最後は天皇の聖断を仰ぐことによって戦争は終結し、皆さんも知つてのとおり、終戦ということが官僚によって作られました。戦争が終わる、この言葉はポツダム宣言の前文に書かれている *end this war* をそのまま援用し、彼らは終戦と訳しました。終戦、全く自然現象と同じように、自分たちの主体と関わりないところで戦争が終わった。ある日突然中国で戦争が起き、結果として終戦になった。終戦という言葉は間違いなくポツダム宣言を流用した官僚の作文です。武器輸出三原則を違う言葉に置き換えるのと全く同じようなことがここでも行われたわけです。言葉を粉飾し、捏造ねつぞうし、そして実態と全く違う言葉によって現実を糊塗する。このようなことが八月一五日を境にして行われたということなのです。

終戦は敗戦でもありませんでした。戦争は聖断によってある時終わった。これが彼らが考えた想定ですし、明らかに旧体制の中枢的な人々は生き伸びました。八月一五日を境にして、戦前と戦後の断絶の中での連続が始まったということです。私は今、日本と中国、日本と韓国とのこの諍いいさかの根幹に、中国の軍拡や海洋進出、膨張があることは否めないと思います。また同時に韓国の中に様々な問題があり、日韓関係が非常に複雑な関係にあるというこ

とも我々は否定できないと思います。しかしながら同時に、「歴史をめぐる記憶の戦争」と言っても過言ではない事態がどこから始まったのか。私は、これは明らかに終戦へと終息していく歴史の中に一つの神話があったからではないか、と思います。なぜ私たちは八月一日から全てを始めなければならなかったのか。六月において日本が戦争を終結させていたとすれば、南北両朝鮮は分断をされなかったでしょうし、またソビエトが参戦することもなかったと思いますし、また広島と長崎に原爆が投下されることもなかったと思います。六〇万以上の方々が、六月から八月まで、言ってみれば戦争指導者たちの犠牲となつて、いわば果てていかざるを得なかったということ、我々は決してそうした事実から目をそむけることはできません。そして高木が言うとおり、帝国の国民も最終的には物件同様に扱われた、奴隷のように扱われたということも我々は否定することができません。チャーチルとルーズベルトと蒋介石によるカイロ宣言の中にこのような文言が謳われていることは皆さんも知つてのとおりです。「朝鮮半島に関しては朝鮮の人民の奴隷状態に鑑みて」と、こう書かれています。奴隷状態は非植民地の敵国の国民だけではなく、最後には帝国の国民もまさしく奴隷のような物件として扱われる惨禍をもたらした、ということです。私は終戦でもなくジョン・ダワーが言うような『敗北を抱きしめて』でもない、日本は敗北を抱きしめてそして廃墟の中から見事に蘇えつたというサクセスストーリーでもなく、私はむしろ解放という言葉を使うべきではないかと思います。本来ならば今日の日は、終戦六九年ではなくて、解放六九年と言うべきだったかもしれません。少なくとも海軍で少将まで勤め上げ、そして東条英機の暗殺計画を立案したこの高木惣吉という彼の言葉を使うならば、まさしく、人を奴隷のように物件化して恥じない国家からの解放の日として彼は八月一日を迎えたはず。人を、国民を物や資源として扱う、このような酷薄な国家が戦争遂行の主体であったことを私たちは決して見逃すことはできません。であるならば、八月一日は屈辱的な敗北であるにしても、同時にそれは解放の日でもあったの

です。

ドイツはナチズムからの解放のゆえにノルマンディーを連合国と共に祝うことができました。果たしてこのアジアにおいて、八月一五日、中国、韓国、日本の首脳が共に寄り添いながら八月一五日を祝うことはいつになつたら可能でしょうか。国民の生命を物件や物の資源としか見ない、そしてそれを恬として恥じずに、そして戦後もまたそのようなことを計画しようとした革新官僚のこのエリートたちに対する高木惣吉の満身の怒りというものは、我々が読んでも胸を打つものがあります。その革新官僚の血筋を引く人が今日本において内閣総理大臣になり、また韓国においてはかつて軍官学校を出て満州国の忠良なる天皇の兵士であつた人の血筋を引く人が韓国の大統領になつております。私たちは依然として過去のしがらみから解き放たれていません。私たちが考えるべきは終戦でもなく、そして敗北でもなく、むしろ日本は六九年、解放を抱きしめて生きてきたのだということを、私たちはこの六九回目に改めて考え直す必要があるのではないかと思います。

### 解放の、民主主義の未完

高木はその後、熊本の人吉でひっそりと生涯を送りました。海軍の中にもこのような人がいたということは、私にとつては大きな、大きな救いでもありました。人を、国民を資源としてしか見ない、物件として見なす。自由なる主体としての国家を担う人々が、まさしく自由なる主体として国民を物件としか考えない。このようなあり方を、あの三月一日以降においても我々は目の当たりにすることができました。原発の被害にあつた人々を、まさしくそのような視点から見る国家の酷薄さというものを、我々は嫌というほど感じさせられました。私たちは、人間を、個々人を、国民を物件として見なすことを恥じない国から本当に解放されたと言えるでしょうか。この点において

は韓国も然り、また中国も然りだと思えます。私たちはある意味において、この六九回目の八月一日を解放の未完として考えなければなりません。もし高木惣吉が今ここに生きており、三月一日とあの未曾有の原発事故を経験した国民、国家が、同じようにまた国民を資源として見なし、そして原発についても事実上の国策としてこれを遂行していく国のあり方を見たときに、彼はたぶん同じような考えを持つのではないかと思います。そう考えれば、この六九回目の今日の日はただ単に六九年目を迎えただけではなく、また六九年前を我々がただ記憶の中に温めるだけの日ではなく、今を生きる、三月一日以後を生きる日本の社会にとって大きな、大きな意味がある日だということなのです。

近隣のアジアの諸国が塗炭の苦しみにあえば、自らも塗炭の苦しみを味わうということを我々はここから引き出すことができました。そして私たちが国民を資源や物としてしか扱わない国の形を変える。私はそれが戦後民主主義が目指したものだと考えております。戦後民主主義が目指したものの、それは平和であり、民主主義でした。その平和である民主主義は人間の基本的人權を確立しなければならないということから出発したと思います。

国民主権であるということはまさしくそれを意味しています。国民一人ひとりが物件や資源の塊ではなく、生きる人間としてかけがえない命を持ったものとして最後に国のあり方を決定する、また決定する権利を持った主体として戦後民主主義は出発したのだと思います。戦後民主主義は決して終わっておりません。戦後民主主義は依然として未完のままです。我々は三月一日を経験し、戦後民主主義は決して完成されたものではないということを理解しました。今もって、原発を推進し、それにお墨付きを与える国家からすれば、あの福島で呻<sup>しんげん</sup>吟している人々は、ちょうど高木が批判したように、国家総動員体制の中の資源であり物件であり、物としか見なされていないということを、我々はすぐに理解することができるようです。私たちは一人ひとりのかけがえないささやかな幸福、

そして私たちのかけがえのない次の世代に向けたメッセージを考えながらこの地域社会の中で生きています。しかし戦争というものは、そうした一人ひとりのかけがえのない人生や幸せを踏みにじるだけではありません。いつの間にか自分が物として扱われることに痛痒を感じなくさせ、そしてやがて自分より下だと思えるような多民族に対する、他国に対する蔑視感となって外側へと拡大していくとき、あのような戦争というものが無惨にも展開されたのだと思います。

私は三〇年前にふたつの八月一五日の和解を考えました。しかし、それはますます遠のきつつあるという思いを抱かざるを得ません。しかし私は今、日本の社会で生きております。この日本の社会でまた骨を埋めるつもりであり、ここで私は跳ばなければなりません。ここはロドスだと思えます。ここで私たちはどう生きるのか。その時に私たちは国民を物件と見なすような国家とは違う国家のあり方を目指していかなければなりません。今、日本の社会の中で一部であれ、強い力を持つて湧きつつある歴史修正主義としか言いようがない歴史の改ざん、修正が国家への愛国の道として賞揚されていることは皆さんもご存じのとおりです。日本はサンフランシスコ講和条約を通じて初めて国際社会の中に復帰しました。サンフランシスコ講和条約第一条には、日本国は極東国際軍事裁判所ならびに日本国および国外の他の連合国、戦争犯罪法廷の裁判、ジャッジメントを受諾する、と書かれております。私が非常に危惧を覚えるのは、まさしくこの東京裁判史観を自虐史観と考え、東京裁判およびその承諾の上に立つサンフランシスコ体制に対するいわば隠然とした挑戦というものが、政権の中核や、あるいは一部のメディアや学者やジャーナリズムの中に語られつつあるということです。

## 歴史改ざん・隠蔽の危惧

東京裁判、極東国際軍事法廷には明らかに大きな不備がありました。明らかに大きな不備があったことは否めません。確かに勝者による敗者の裁きであったことも否めない面があったと思います。果たして日本の戦争遂行者に共同謀議と言えるようなものがあつたのか、なかったのか。様々な問題がこの判決の中にあつたことは否めません。しかし、もしこの極東国際軍事裁判所がなかったとすれば、昭和天皇は訴追されずに戦後も天皇の地位に就くことができたでしょうか。できなかったと思います。天皇を訴追しないことを前提として、この裁判は決行されました。結果として、A級と見なされた戦犯たちが絞首刑、病死、あるいは後に釈放になりました。そして満州国の経済帝王とも言われた、そして東条内閣において総力戦を事実上仕切った岸元首相はA級戦犯の容疑をかけられ巣鴨ブリズンで三年間の収容人生を送りました。後に彼はご承知のとおり復活をし、五五年体制の立役者になり、やがて内閣総理大臣になり、六〇年の安保改定まで彼はその権限を振るうことになりました。にもかかわらず、この東京裁判をもし否定するとしたならば、日本はいつたいどこに向かつていくのか。東京裁判の否定ということはサンフランシスコ講和条約第一条に挑戦をするということであり、戦後日本の存続自体が危ぶまれるということは言うまでもありません。あの戦争が日本に大義があり、そしてあの戦争の中で動員された人々が、そしてそこで春をひさがなければならなかった人々が、いつたいどのような人生をその後歩んだかということを考えれば、この東京裁判の中に植民地支配をはじめとする様々な問題が裁かれなかったという欠陥があることも私たちは否定することができないと思います。しかしそれにもかかわらず、この極東国際軍事裁判で私たちは、戦争への犯罪、平和への犯罪、人道への犯罪ということを教えられました。そしてその後の様々な戦争犯罪を裁く雛型としてこのニュルンベルク裁判と東京裁判が大きな役割を果たしたことを、また我々は否定することはできません。

現在の日本の中にこの新しい戦前を望むような力があります。彼らが目指すものはまさしく、今申し上げたような日本のあの戦争をどう見なすのか、というその一点にかかつての歴史の改ざん、歴史の言い換え、歴史の隠蔽というものでしょう。それが図られようとしていることを、私自身は個人的には大きな危惧を持って見ていざるを得ないという立場です。戦争とその歴史、記憶、これを我々はどうのように明記したらいいのか。もう一度三〇年前の私のふたつの八月一日に戻って言えば、私たちは終戦でも敗北でも屈辱でもなく、解放という言葉を通じて、日本は八月一日で遅まきながら出エジプトを果たしたのです。捕囚の民の苦しみの中から日本は出エジプトを果たしたエクソダスの日として八月一日を明記すべきであり、また植民地支配の重圧の中で苦しんだ人々にとつても八月一日は解放の日でした。

私たちはどのようにして、そのような解放として八月一日を迎えることができるでしょうか。依然として敵か味方か、こちら側かあちら側か、日本人か中国人か、この二者択一でしかない形で八月一日を迎えろとするなら、私たちは半永久に和解の道を歩んでいくことはできないのではないかと思います。

個人的に申し上げれば、私は一九五〇年八月一二日に熊本で産まれました。私の係累はその当時、熊本において憲兵をしていました。憲兵をし、そして憲兵として迎えた八月一日はどのようなものであったのか。そして肉親を残し韓国に帰り、その後立身出世を遂げたこの旧日本軍人であった植民地出身の若き青年の人生というものもまた、一つの大きな、大きなドラマを含んでいます。このような人生は稀有な事例だったかもしれませんが。しかし日本と朝鮮半島とが、宗主国と被植民地国として様々に重なり合いながらあの戦争の時代をくぐり抜けてまいりました。日本の臣民や日本の兵士や日本の国民がいるところには必ず朝鮮半島出身の人々もまたいました。広島と長崎で何万の人々もまた被爆を被りました。そう考えていくならば、あの戦争は日本人の日本人による日本人のための



戦争ではありませんでした。帝国は間違いなく異民族を包摂し、異民族と共にあの戦争を戦わざるを得なかったというのが現実です。私の身内にとつての八月一日は、日本の帝国臣民よりもっと屈辱的な敗戦として迎えた日であるはず。そう考えていけば、私は、あの八月一日をめぐる私たちの終戦という神話の中に、八月一日を八月一日以後の戦後へと切れ目なく連続させる力が働いていた、としか言いようがありません。明らかに旧体制は生き残りました。極端な軍人や一部の様々な過激な人々を完全に切り離すことによって、旧体制はある意味においては生き残ったと思います。その結果として私たちは今六九年を迎えています。このような六九年は、私はなるべくしてなったと考えざるを得ません。それにもかかわらず、あの終戦の日、日本の国民が終戦と言ったその日に様々な可能性がうごめいていたこともまた事実です。八月一日を人々がどのように迎えるかによって、日本と中国と韓国、朝鮮半島のこの三つの国々にまたがる人々は、新しい戦後に向けた構想を共に分かち合うことができずです。しかし現実には既に冷戦が始まり、そしてやがて中国は内戦になり、一九五〇年朝鮮半島は民族分断、一説によれば二〇〇万とも三〇〇万とも言われる人々が地上戦で消えて亡くなりました。東アジアの現実、ベトナム戦争が終わるまで、一九七五年まで三〇年間、戦争が続いていました。

平和憲法を胸に、敗北を抱きしめて、しかし沖縄を切り捨て、しかしとにもかくにも豊かさを求めて多くの日本国民は必至で戦後を生き抜き、やがて六〇年代の高度経済成長を成し遂げました。平和で繁栄する日本、豊かな日本、戦争を知らない日本が出現しました。しかし今、そのような日本を邪険にし、またそれを支えてきた憲法を邪険にする動きがこれまで以上に強くなっているということを、私たちはひしひしと感じていると思います。



## 私たちなりのささやかな行動を

もう一度八月一日以前に戻って、可能性として八月一日ではなくて六月一日だったかもしれない、というような想定を私たちがすることは、決して無駄ではないと思います。そこから逆照射される八月一日、これを我々はどう捉えたらよいのか。私は三〇年前にいつも夢見ておりました。三つの国々の人々は、広島で、長崎で、あるいはソウルであるいは南京で、共にあの戦争について語り合い、そして人々の解放というものを共にもう一度確かめ合う。そういう姿が我々の目の前に展開されないのかどうか。あの三月一日が起きたとき、私はもしかしてその方向に向かうかもしれないという、ほのかな夢を描きました。三月一日の東日本大震災と原発事故を通じて、日本の国民はあの八月一日に匹敵するほどの震撼すべき事態に直面させられました。周りの国々は、日本の国民と日本の国に手を差し伸べようとなりました。東アジア共同体論がまことしやかに語られるようになりました。私は三〇年前に書いたこのささやかな一文が、まるで実現に向けて着実に一步一步前に進んでいるような感覚に襲われました。個人的にどのような不幸があっても、歴史は間違はなく前に向かって進んでいるという歓びに満ちておりました。しかし三年数カ月経ち、そのほかない希望は無惨にも打ちひしがれ、冒頭申し上げたように第一次世界大戦前夜と言っても過言ではないような不穏な空気が私たち日本に生きるものの周りに立ちこめています。そこで我々はどうしたらよいのか。我々はどうのようにしたらこの和解への道を閉ざさずに済むのか。たとえどんな小さな力であれ、人間を、国民を物件と見なすような、そのような国のあり方を少しでも変えていく、そこにささやかな力でも手を貸さない限り、私たちはささやかな幸福ですらも叶えられないということを、あの三月一日から、またあの六月から八月一日にかけての終戦の歴史を見れば、我々はそこから学び取ることができると思います。

私たちは決して政治のプロでもありません。政治において我々はアマチュアであり、普通の人々です。しかしそ

の普通の人々が面倒臭さを厭わずに、ある時にアマチュアとして政治に加わるということがいかに我々にとって大切かということを、歴史は教えています。

私たちは今もなお、国民を資源としか見なさない国家の頸木くびきの中にあります。三月一日がそれを否応なしに示してくれました。どれだけ多くの人々がこのような問題で苦しんできたでしょうか。沖縄然り、水俣然り、広島然り、長崎然り、福島然りです。このように人々をあたかも目に見えないように隔離し、私たちは普通の人々の平和と繁栄を考えてきました。しかし三月一日は、私たちに、私たちが考えていた戦後民主主義のある視野狭窄というものを否応なしに突き付けたと思います。私たちはそのような犠牲、サクリファイズによって成り立つ繁栄や平和というものがいかに脆いものかということも実感しました。私たちはそれぞれの持ち場で、ささやかでもありながらも私たちの意思を表示し、そしてあの八月一日をもう一度嚙みしめる。そして来年もう一度めぐってくるであろう八月一日に向けて、私たちなりのささやかな行動を始めていかなければなりません。

今日はこのような会を、シンポジウムや討論の形式ではなく、祈りと私の講話で全てを終わらせようと企画いたしました。八月一日に様々な対話、様々な人々の沸き立つような他事総論があっても不思議ではないかもしれません。しかし今日はただひたすら祈り、そして祈りの中から出てきた私の講話を皆様方がどうか心のどこかに覚えていらつしやれば、もう一度、戦後七〇年、一年後にこの場で皆様方ともう一度対面することになると私自身は思っております。わずか一時間の私の講話ですけれども、皆様方の中に何か一つでも心に残れば、それこそ望外の幸でございます。どうもご清聴ありがとうございました。